

星鹿小学校には「二夢一徹」

の私の書がある。今年の民話ミューシカルは星鹿小学校である。巡り合わせである。電話で亮善和尚は「大歓迎はしますけん」と言っていた。星鹿が大歓迎をするのである。どんな歓迎だろうか。おっとろしか。浄土寺の境内は私たちの遊び場であった。いまの亮善和尚の先々代が亮雄ご住職であった。亮善和尚は「男はつらいよ」

の柴又の御前様に似てなくもない。亮善和尚は説教臭くなく説教をした。私にはあの真似はできない。亮善和尚は私に手招きをして、座敷の火鉢で餅を焼いてくれた。あれはうまかった。砂糖醤油であった。砂糖は貴

しい。まるで江戸っ子である。人生はまるでまるでの繰り返し」。あの世のこの世の門が寺である。その寺を守る人を侍という。境内では漫画雑誌「冒険王」や「少年」の回し読みをした。

によく似た8本足の火星人と宇宙服の地球人が握手をしたりしていた。宇宙人の蛸は、どれが手でどれが足なんだろうか。テレビは立体テレビであった。あの時代、21世紀は遠い未来であった。

に来てはいるんですよ」と言っていた。すでに「未知との遭遇」をしているというのである。「ああ、分かった。宇宙人はあいつだ」。和子姉さんにも未来の話をしたが、ころころと笑っているだけであった。いま、和子姉さんは80歳近くになって、長崎市でころころと笑って生きている。

和尚さんと禅問答

重品であった。

「和尚さん、あの世はあると」

その漫画雑誌には、よく21世紀の地球が描かれていた。21世紀の地球は宇宙船が飛び交い、

先日、宇宙に詳しい人に「宇宙人はいつ地球に来るのですか」と聞いたたら「もう、とっく

先々代の亮善和尚にも21世紀の話をした。亮善和尚は「そげん未来に私が生きているわけでもなし」とにべもなかった。浄

「あの世はな、あると思う人にはある。なかと思う人にはな

か」。まるで禅問答である。「耕大ちゃん、あの世の小唄

ばしてやるか」「うん」「あのよう」「えっ」「あのよう。お

土寺は慶長11(1606)年に開山している。星鹿に唯一のお寺ということもあって、星鹿の人を支え、また支えられている。



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

(松浦市出身)